
射殺漫才

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

射殺漫才

【Nコード】

N 8 1 1 3 D

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

どれもこれも見飽きたタイプのネタばかり！そう言われて追い詰められたお笑いコンビが繰り出す切り札とは……。

あまりウケのよくないお笑いコンビがいた。

彼等のネタは、どれもこれも二番煎じだと言われ、軽くあしらわれてしまうことばかりだったからだ。

ギャグも全てが使い古された語感のものばかり。二人はおかげで「使用済みのお茶っ葉」という、不名誉なあだ名がつけられるようになるほどだった。

そうなってから、二人は初めて悔しいという感情を覚え、怒りを沸き立たせた。

ある日、ボケの坂橋さかはしが、ツツコミの綱片つなかたに、鼻の穴をでかくしながらこう言った。

「ネットで好き放題叩いてる奴等に一泡吹かせてやろうぜ！」

綱片は、すぐに胸を張って同意した。

「ああ、あのアホヅラさげてヘラヘラ笑ってる連中を、笑い殺しにしたる！」

「じゃあ、あのネタやるか？」

「それがいい。もうこうなれば切り札を出すしか俺達に道はないんだ」

「だったら話は早いな、いくぞ？」

そう言って坂橋は、平凡な金庫にがっしりと手をかけた。

綱片は、言うまでもないとばかりにしっかりと頷き、二人は深い決意を固めたようだった。

もはや迷いなどあるものかと、坂橋は勢い良く金庫を開け放った。

翌日、若手の漫才舞台に二人は出演した。

実を言えば彼等は、若手と言われるような芸暦ではない。かれこれ二年は頑張ってきた。

しかしそれでも、二年という経歴から、ギリギリ若手という位置に事務所が彼等を滑り込ませてきたのだ。

チャンスといえばチャンスだが、彼等自身にとっては、屈辱このうえなかった。

楽屋や舞台袖でオロオロしてる奴や、ちょっと人気が出たからって鼻高々になってる若手と一緒にされる悔しさは、一言では表せないものがあつた。

こうなれば、今回の一回にかけて、自分達の名を一気にあげるしかない。

二人は拳をぶつけあつて、今回の成功を祈りながら、出番を待っていたが、間もなくして二人のコンビ名“バッキューンズ”がステージ上で呼ばれ、二人は舞台にあがつた。

「どうも、バッキューンズです」

客の反応はイマイチだったが、坂橋は挫けなかった。

「最近寒いですねー」

「そうか？ もう春やないか」

「何言ってるんですか、うちのサイフは常時真冬ですよ。誰かさんのせいで」

「誰かさんって誰や」

「じーっ」

坂橋は、とても恨めしそうに客の方を見た。

「って、何客のせいにしとるんじゃ、このヴォケ！」

と、綱片は、手の甲を板橋の胸板にパシーンと叩きつけた。典型的な突っ込みの仕方である。

しかし、彼等の漫才の突っ込みはそれだけでは終わらなかった。なんと突っ込んだ綱片の服の袖から、隠し拳銃が飛び出して、突っ込みと同時にバーンと弾が放たれたのである。

放たれた弾丸は、板橋の服の表面を焼ききって、心配そうに舞台袖でステージを見ていたプロデューサーの顔を貫いた。

血がピューッと飛び出してきて、バッキューンズはわざとらしく「

うわー」つと驚いた。

この微妙さ加減が客にウケたのか、客席は少し笑いに包まれた。今だ、とばかりに二人は畳み掛けていく。

「ほれ、お前が失礼なこと抜かすから、プロデューサー顔面撃たれて死んでもうたわ」

「んなこと言っても、生きるためにはプライドも礼儀も捨てなくちゃ、また明日もゴミ漁りだよ」

「ってそんなことしてたんかい！」

パシーン、と平手打ちをすると、また袖から隠し拳銃が飛び出した。

今度の銃弾の矛先は、最近ピンとして売れている噴火山男という、ハジけた芸をする若手の心臓だった。

ドピューツと勢いよく飛び出す血の噴水のシニールさに、客席はどンドン沸いてきた。

「おいおい、後輩撃ち殺すなよ」

「お前がアホやからやる！」

今度は相方の脳天にチョップした。すると、またバーンと弾が出た。

放たれた銃弾は、客席で少し気取ったようにポップコーンを食べていた、ちよつとオデブ気味なお笑いオタクの頭に直撃した。

気取った笑いのままバタツと倒れて、また血がピューツと飛び出した。少し客席は静まり返ったが、ピューツという音のシニールさに、すぐ笑いは戻った。

調子にのつた彼等は、ついには客席をもつとネタにすることにした。

「にしても皆さん、すごい笑ってますけど、残酷な方々ですねえ」

「いい加減に客に当たるのやめんか」

「だって、私もこうして持ってますけどね、これ全部実弾ですよ」
えっ、という声が客席で一斉に八もった。

それを聞いて、二人のエツと舞台袖にいた人間達のエツも八もつ

た。

少し沈黙したかと思うと、客は歓声ではなくて悲鳴をあげて、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑っていった。

舞台袖にいた人間も、気づいたら全員そこから消えていた。舞台の空間に残ったのは、バキューンズと死体だけになった。

シーンと静まり返ってしまった舞台の上で、二人は啞然としていたが、すぐに喧騒は戻ってきた、警察がやってきたのである。

「動くな！」

やってきた警官は、顔を真っ赤にしていた。

もしかしてこの警官の知り合いを殺してしまっただけ怒っているのかと、二人は怖くて思わず抱き合った。

警官は、怒ったままに銃をうえに向けて、辺り構わず撃ちまくった。

そして一言、爆弾のような大声で、怒鳴るようにして、二人にこう叫び散らした。

「そのネタはなあ！ 俺が警官になる五年前に考えたネタなんだよおっ！」

二人は警官の一言に、これもパクリだったかとガツクリして頂垂れた。

一方、怒り狂っていた警官は、乱射していた銃の弾の一つが、上の照明器具に当たったらしく、それがひゅーっと落ちてきて、怒った顔のまま押しつぶされて死んだ。

すると、それを見た二人は、一転して今度は手を取り合って喜んで叫んだ。

「やったやった！」

「これで俺達が本物や！」

こうして喜んでいた二人だったが、まさか射殺漫才という新たなジャンルを切り開いた二人が、後に死刑囚として裁かれて、獄中で

死刑漫才を考案して伝説になるとは。

このときは、きっと夢にも思わなかったでしょう……。

（後書き）

ごはんライス先生の射殺シリーズを書いてみました。リスペクトおぶゴハンらしいす。

射殺シリーズ的には毒が足りない気もしますが、ごはんライス作風をより真似てみることに執着してみたので、その辺りは割愛してください。オチが意味不明すぎたかな、というのが反省点。次はもっと過激にやってみようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8113d/>

射殺漫才

2010年10月8日15時31分発行